

2020年6月28日

午前11時。サンディマウントのディグナム家から、ブルームはマーティン・カニンガム、ジャック・パワー、サイモン・デダラスと共に会葬馬車に乗り込み、プロスペクト墓地へと向かう。ウォータリー横町を渡ったところで、ブルームはスティーヴンの姿を目撃する。息子が付き合っている「ろくでなし」のマリガンに対して口汚く悪態をつくサイモンを傍目に、ブルームは生後11日で亡くなったルーディのことを想う——レイモンド台に住んでいた頃のある朝、窓から「二匹の犬」が交尾する様子を眺めていたモリーが、「ああ、もうたままない(God, I'm dying for it)」と言い、「かくて生の始まり(How life begins)」となった息子である。

ブルームの連想は「モリー。ミリー。……若い学生さん [=第1挿話のパノン(U-Y.42)]」と続き、大運河(グランド・カナル)近くの「犬の収容所」が眼に入ると、父が飼っていた老犬アトスを想起する。ユダヤ人のルーベン・Jとその息子について(自殺と溺死のモチーフが浮上する)、ひとしきり笑った一同はディグナム(パディー)なら許してくれるだろうと思うが、死因の心臓衰弱、すなわち突然死に対しブルームが「最善の死ですよ」と言うと、彼以外の3人は目を見開き、口を閉ざしてしまう。カトリック教徒にとっては極めて重要な「終油の秘跡」が受けられないことへの無理解は、否応なしにブルームのアウトサイダー性を際立たせるが、彼はそのことに気づかぬまま、「パネルの礎石。衰弱。心臓」、そして、生まれたときのルーディの顔を思い浮かべる。

話題が自殺に及ぶと、〈事情〉を知らないパワーとサイモンが強い言葉で非難するのに対し、カニンガムはさりげなくフォローを入れる。彼の気遣いに感謝するブルームの内的独白から、読者はここでようやく第5挿話では暗示されるに留まっていた、彼の父の死因が服毒自殺であったことを悟る(さらに、本挿話後半の墓地において、ブルームが聞いていない状況で交わされるカニンガムとパワーの会話から、ブルームが月末にクレア州へ行くのは、彼の父の命日に関わることが明かされる)。

プロスペクト墓地に着いたブルームが「粗末な葬式」と考え、「世界中いたるところで毎分毎分、葬式がある」と想いを巡らせていると、突如語りはブルームに聞こえないように、前述のカニンガムとパワーの会話を写し取る。これまでずっとブルームの思考と感情に寄り添って来た語りは、この後、霊安堂を出た後の場面でも、ブルームの聞こえない場所で、彼についての噂話がなされる。

いよいよディグナムが埋葬される運びとなるが、ブルームは彼に同情する一方で、「雨外套(マッキントッシュ)」を着た男の存在を気にしたり、もし棺の中の「あいつがまだ生きていたら？」と考えて恐ろしくなり、「電気時計や電話を備え付け」るべきだと考える。さらには、死者を思い出すために「墓の一つ一つに蓄音機を備える」奇想を紡ぐ。幾重にも積み重なった死のイメージに満ちた挿話は、「やれやれ浮世に戻る。……見たり聞いたり感じたりすることがまだまだ山ほどある」というブルームの内的独白で終わるが、これは次挿話のスティーヴンの独白「ダブリン。学ぶべきことがまだまだ多い」と響き合う。



グラスネヴィン墓地 (2014年6月16日撮影)